

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例
-------	--------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

山梨県北杜市長坂町

○学校名

北杜市立甲陵中学校

○学校のURL

<http://www.koryo-jhs.city-hokuto.ed.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】各学年1学級 【特別支援学級】なし 【合計】3学級

○児童生徒数

【全生徒数】120人 (内訳 各学年とも40名)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】 <高い志を持った気骨ある生徒の育成>

- (1)健康で、たくましい生徒
- (2)知性が豊かで、創造的な生徒
- (3)徳性が高く、自己を磨く生徒
- (4)感性に富み、心豊かな生徒
- (5)歴史文化に関心の持てる生徒

【人権教育に関する目標】

「集団の一員としての自覚を持ち、周りの人への温かい思いやりの心を持つ生徒の育成」

「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他を尊重する生徒の育成」

○人権教育にかかる取組の全体概要

- * 教科・道徳・総合的な学習の時間・学校行事等、教育活動全般をとおして人権に関しての生徒の意識の高揚を図る。
 - ・外部講師の活用（思春期講演会・赤ちゃん体験・弁護士による模擬裁判・インターネットの活用について）
 - ・体験活動（福祉施設訪問・職業体験）
 - ・生徒会等で行うボランティア活動などにより人権意識の啓発を図る。

3. 特色ある実践事例の内容

・取組のねらい、目的

本校立地である北杜市出身の浅川伯教・巧兄弟は、中学校の歴史の教科書に取り上げられるなど、近年注目されている。朝鮮が日本統治下であった時代において、彼の地の芸術を評価し、人を愛した兄弟の姿は、人権感覚にあふれ、真の平和を目指す姿である。

そこで、郷土出身の偉人である浅川巧について知り、その行動から人権意識を考えること、また、演劇という形で、表現することによって、より感覚的に平和・人権について考えることをねらいとしてこの取組を行った。

・取組のきっかけ

直接的なきっかけは、「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会」から、地元北杜市の偉人である浅川巧の生涯の劇を創作し、偲ぶ会の総会で披露してほしいとの依頼からである。

校内で検討の結果、

- ① 本校の総合的な学習の時間に行われている「八ヶ岳南麓学（八ヶ岳南麓の自然・歴史・文化の探究）」の趣旨に合致していること、
- ② 本校ではオーストラリア語学研修を行うなど、国際理解教育にも重点を置いているため、韓国というアジアの隣国について理解を深めることは有意義であること、

という観点から、浅川巧の演劇に取り組むことにした。

・取組の内容

- ①浅川伯教・巧兄弟について、また、当時の社会情勢について学ぶ
- ②脚本の作成（各種資料を基に、担任が創作）
- ③演劇の練習
- ④劇の上演
- ⑤感想文集の作成

・取組の主体や実施体制

演劇の練習に関することは学級執行部、事前学習に関しては学年主任及び担任、外部（資料館や偲ぶ会・市当局など）折衝に関しては校長・教頭が中心となり、担当した。

・取組の頻度

第1回上演に続き、翌月に再上演をした。また、翌年にも学園祭と「浅川巧シンポジウム」で上演した。

・取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫

まず、第一に生徒が浅川兄弟についての知識をもっている生徒が少ないという

課題があった。本校は中高一貫校のため通学地域が広く、立地している北杜市以外からも多くの生徒が通学している。そのため、郷土の偉人といわれてもなじみのない生徒が多かった。そこで浅川兄弟について学ぶために次のような工夫をした。

- ①浅川巧を主人公にした小説「白磁の人」（江宮隆之著）を市立図書館から10冊借り、学級全員で読んだ。
- ②「浅川伯教・巧兄弟資料館」の協力をいただき、学芸員の方を学校に招いて、浅川兄弟についての講話をいただいた。
- ③「浅川伯教・巧兄弟資料館」に見学に出かけ、実際の手紙や朝鮮の生活に関するジオラマ、写真などの資料を通して学習を深めた。
- ④山梨県道德教育用郷土資料集に掲載されている浅川巧の資料を利用して、道德の授業を行った。
- ⑤浅川巧について正しく知るため、脚本はできるだけ史実に忠実に作成した。また、脚本には劇中のエピソードの原典（日記や著書など）を掲載した。
- ⑥「朝鮮の人々と共に生きる巧」と「日本人の目線で朝鮮の文化を守ろうとする巧」の両方を意識できるようなエピソードをまじえて脚本を作成した。
- ⑦郷土の風土・文化が巧に与えた影響を考えさせる場面を設定することによって、巧を身近に感じられるよう工夫した。

次に、劇を演じる上で欠かせない韓国語についてどう取り組んだらいいかが課題であった。卒業生の保護者に韓国語が堪能な方がおり、ご指導を仰ぐことができた。

第3に衣装等の準備が課題であった。衣装は偲ぶ会を通じて探していただき、借り受けることができた。



4. 実践事例の実績、実施による効果

・取組の実績

- ①「浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会総会」で上演。当初は一度だけの上演予定であったが、第1回上演の反響があり、市当局からの要請で「市政報告会 公演会」で上演
- ②翌年「浅川巧シンポジウム～日韓の芸術交流と浅川巧の業績」（北杜市、同市教委主催）において上演。また、本校学園祭においても上演した。

以上計4回の上演を行った。特に浅川巧シンポジウムでは、600名を超える観

衆の前で上演することができた。また、各種報道機関にも取り上げられ、自分たちの活動への反響を客観的に感じることができた。

・取組が効果を上げた実際の事例

演劇という手法を使ったことで、差別問題、平和問題に関するよいロールプレイングとなった。そのため、生徒はより深く問題意識を感じることができた。また、音楽や大道具の係などを含め、全員で取り組むことができたことも、様々な問題に対する共通意識がうまれる要因となった。さらに、演劇後の反響からも自分の思いを確かめることができた。

【事後の作文集より】

*僕は浅川巧は、誠実な人なのだろうな、と思った。その「誠実」さを意識していないことが演技に出ていたようだ。先生に指摘されて、初めて気が付いた。そして、浅川巧について、深く考えてみた。浅川巧は、自分のことより、他人のことを大切に思った人だ。朝鮮のために自分の人生をささげた、誠実で、でも愛敬のある優しい人物なのだと。そのことを考えながら演技すると、少しずつだけどうまくなっていった。

*劇が終わって観客の見送りに出た時、沢山の韓国の人に話しかけられた。何を言っているのか分からなかったが、満面の笑みで力強い口調だった。この上なく嬉しかった。人が笑顔だと私も笑顔になるので私たちは幸せだった。初めて国際交流をしたと思った。異国の言葉は私にとって新鮮で、だが伝わらない言葉の壁があった。それでもお互い喜びを分かち合えた。…



5. 実践事例についての評価

・取組についての評価、及びそう評価する理由

差別や平等についての意識向上について十分な成果を上げることができたと考える。取り組み後の作文や言動から、今回の取組を通じて、差別の問題や戦争の問題に関する理解が深まったことがわかる。この演劇に取り組むまでは日朝の問題についての関心も知識も乏しかった。差別問題と言えばユダヤ人のことだと考える生徒が大半であり、身近なものではなかった。しかし、この演劇を通じて自分たちの差別意識や戦争や平和の問題についても考えを及ぼす生徒がいた。また、巧の持つ人間性に着目した生徒も多く、「自分の意志を貫く」「差別をしない」「優しい」などのイメージをもち、自分もそれに近づきたいという感想を書いた生徒も多くいた。

さらに、英語弁論大会の演題や卒業研究のテーマに浅川巧を取り上げる生徒もおり、発展性のある取り組みとなった。

＊地元紙に掲載されたコメント

- ・「浅川巧のように他者を受け入れ、認め合うことは必要。そういった人を演じられるのはうれしい」（主人公役）

＊事後の作文集より

- ・この劇を行ったことで僕は二つのことを感じた。一つは絶対に人を見下してはいけないということだ。これは主人公の人柄で、このことで巧は沢山の人から愛されるようになったからだ。以下略（聴衆役）
- ・「朝鮮人を見下すのはよくない。」誰でも心の底ではそう思っていたはずだ。けれども、それを口に出すことすら当時としては困難だった。それでも巧さんは自ら行動し、日本と朝鮮との架け橋的存在になったのだ。その逆境に立ち向かう勇気こそ、巧さんの偉大さなのかもしれないと、ふと思った。（朝鮮人を見下す日本人役）

＊保護者や地域住民からの反応

上演後、新聞等にこの演劇に対する声が投稿された。また、学校に「生徒たちが浅川巧という人間をよく理解しその生き方に共感したからこそ、素晴らしい公演になった。」というような感想のメッセージがメールで届くなど大きな反響があり、生徒は自分たちの思いが、演劇を見た方々と共有できたことを知った。多くの保護者にも観劇していただき、中には浅川巧ゆかりの場所まで家族で見学に行かれた家庭もあった。

＊地元紙への投稿（抜粋）

甲陵中の生徒による演劇「種蒔く人・浅川巧」では、朝鮮の人たちの日常や文化に敬意を持って接した巧の姿、その思いを熱演した。会場に詰めかけた約400人の聴衆に感動の涙を誘った。

・現在、実施にあたって課題と感じていること

今回の取組は、学年が中心となって行われたものであるが、今後この取組をどのように広げ、また、次学年につなげていくかが課題であると感じている。



【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

北杜市立甲陵中学校

通学地域が広い中高一貫校だが、外部講師の活用、職場体験や施設訪問、ボランティア活動等の体験学習を工夫して、地域や関係諸機関との積極的な連携・協力のもと人権意識の醸成を図っている。その中で、本事例は、「郷土出身の偉人の生涯を劇化して発表してほしい」という地域住民からの要請に応じて実践されたものである。

地域のニーズと自校の教育課題との調整、分掌や教育課程上の位置付け、「(なじみのない)郷土の偉人」を生徒の関心事にして学習意欲を喚起・持続していく工夫、地域や関係機関との連携等、「第三次とりまとめ」にある「効果的な学習教材の選定・開発」の実際が示されている。劇化の手法(参加的・協力的な体験活動)が人権問題への関心を喚起したり学習を活性化したり、行政や保護者・地域住民からの肯定的評価が生徒の達成感・有用感を確かなものにしたりしている。この実践をどのように継承・発展させるかという本校の課題意識は適切である。